



学年団を訪ねて

コロナ禍で孤立した生徒たちを 学年団一丸となったきめ細かな面談で支える

沖縄県立開邦高校 2学年団

臨時休業下に入學し、高校生としての学習スタイルの定着や、生徒同士の人間関係の構築が十分にできないまま高校生活をスタートさせた生徒たちを、学年団の教師たちは、きめ細かな面談で支えていくことを決意した。



直面した課題

- ◎コロナ禍による臨時休業下に入學した生徒たちは、同級生とのコミュニケーションの機会を失ったことで、学習上の悩みを他者に共有できず、不安を増大させてしまうケースが多く見られた。
- ◎成績上位者であっても、自己肯定感が低い傾向にあり、高い目標に向き合い続けるための支援が必要であった。

学校概要

校訓「開邦雄飛」は、「邦を開き世界に羽ばたく人材を育成する」の理念の下、生徒が県内のみならず、国内外で活躍することを願い、創立20年目の2005年に制定した。2016年度には、これまでの理数科・英語科をさらに発展させるべく、生徒が主体的に探究しながら論理的思考力や表現力を高める専門学科「学術探究科」を設置。同科では、2年次に学術文科または学術理科のいずれかの学科を選択する。芸術科は、音楽コースと美術コースを設置。また、16年には開邦中学校が設置され、併設型中高一貫校となった。



設立 1986(昭和61)年
形態 全日制/学術探究科、芸術科/共学
生徒数 1学年約240人

2021年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京藝術大、東京工業大、東京大、京都大、神戸大、九州大、琉球大などに128人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ72人が合格。



生徒の不安と、自己肯定感の変化を把握するため、学年集会などの機会を使って、アンケート調査を継続的に行っている。
※学校資料をそのまま掲載。

1人で不安を抱え込む生徒を 学年団全員で支えたい

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、臨時休業の中で2020年度を迎えた沖縄県立開邦高校。1学年団は、課題の配信などで生徒の学習支援を行ったが、学習の状況は生徒によって違いが見られた。だが、1学年主任の玉那覇峻先生が、学習習慣以上に問題視したのは、生徒のメンタル面だった。

「本校には、各中学校のトップ層が全県から集まるため、定期考査などで初めて中下位の成績を経験し、落ち込む生徒も少なくありません。例年であればそうした生徒たちも、同級生に学習上の悩みを打ち明け合うことで次第に立ち直り、前向きに学習に取り組むことができるようになります。ところが、20年

度の1学年は、臨時休業下でのスタートとなり、さらには学校行事も次々と中止になってしまったため、クラスメート間でのコミュニケーションを十分に図ることができず、生徒は1人で不安を抱え込む日々が続いたのです」(玉那覇先生)

担任の1人である小野真太郎先生は、「4月に行ったアンケートでは、多くの生徒から不安の声が上がった」と振り返る。

「成績が良好なのに、『授業についていけない気がする』『不安で苦しい』といった、見過ごせないような言葉を書く生徒もいました。継続的に、そして丁寧に生徒を見ていかなければいけないと強く思いました」

玉那覇先生は、「面談などを通じて、例年以上に生徒と密にコミュニケーションを図るとともに、学校生活の不安や自己肯定感について継続的にアンケート調査(図)を行ってきたいと、学年団メンバーに伝えた。

学年団総がかりの面談で 生徒の声を拾い、共有する

生徒の不安をどのように受け止めるべきか、学年団で話し合う中で、主導的な役割を果たしたのが宮城靖先生だ。前任校で進路指導主任を務め、指導経験が豊かな宮城先生は、



リーダーに聞く! 5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか?

A 担任の経験の違いによって生徒への指導に差が生まれないチームを目指しました。

Q リーダーとして心がけていることは?

A 必要な情報を適切なタイミングで担任・副担任に共有すること。そして、進路指導部を始めとする各分掌と先生方をしっかりとつないでいくことです。

Q 学年団としての「成功」は?

A 生徒が楽しそうな表情をしているのを見ると、うまくいっているのかなと思います。

Q リーダーとして自覚する

長所は何ですか?

A フットワークの軽さです。新しいことを始めるのは大変ですが、生徒に必要なと思ったら、躊躇せずに取り組んでいます。

Q リーダーとして自覚する

短所は何ですか?

A 新しいことを始める時に、業務を抱え込んでしまいがちです。学年団の先生方は皆、忙しいと分かっているのに、まずは自分でやってみて、成果や課題を確認してから分担しようという考えになりがちです。最初の一步から、ほかの先生方と取り組むことも、時には必要なのではないかと思っています。

面談時の具体的な声かけの仕方などの支援ポイントを、学年団で共有した。

「不安を吐露した生徒に対する支援のスタンスが、担任によって異なるようなことも避けたかったので、二者面談でのやり取りを、ケーススタディーを交えながら学年団で確認しました。例えば、成績が下降している生徒に、『頑張れ』『最初からやり直せばよい』といった声かけをしてしまうと、かえって生徒を追い詰めることもあります。そのような生徒には、『不安に思っていることを教えて』と聞き、生徒自身に自分の課題を考えさせることが大切だと先生方に伝えました」(宮城先生)

玉那覇先生は、担任に面談の負担が集中して必要な支援が遅くなってしまうような、生徒のアンケートの回答内容に応じて、面談担当者を担任、学年主任、教育相談担当に振り分けることにした。本心を打ち明けてくれた生徒に素早く対応することで、生徒は学校を信頼してくれると考えたのだ。

学校として計画していた面談に加え、学年独自の面談も実施し、1年次は例年の2倍以上の面談を実施した。

「担任の面談を待つ間に、教科担当の教師がミニ面談を行うなど、1学年にかかわる教師が総出で面談を重ねました。『Classi』(※1)上でも生徒の学習への不安などに耳を傾け、夜中に送信されたメッセージや重要な内容に

ついては、すぐに学年団で共有しました。そうすることで生徒は悩みを吐き出しやすかったでしょうし、担任としては生徒の悩みを1人で抱え込まずに済みました」(小野先生)

玉那覇先生は、「本校の生徒は、高い目標を掲げているからこそ、少しつまずいただけで、まだ頑張り切れていないのではないかと自分を責めてしまいがち」と話す。

「自分に厳しいことは悪いことではありませんが、自己肯定感を損なうまでの厳しさは過剰です。生徒には、自己肯定感を保ちながら、進路でも高い目標に向き合い続けて、第1志望を貫いてほしいのです」



写真 新型コロナウイルスの感染状況を見ながら、生徒が仲間と一体感を味わえるよう、学年団が様々なワークショップを開催している。

21年度に開邦高校に赴任し、2学年団に担任として加わった比嘉眞貴子先生も、「真面目過ぎるくらいの子供にこそ、できたことを一緒に喜ぶ教師の存在が必要」と考える。

「本校に来て驚いたのは、模擬試験などで一定の成果を上げているのに、できていないことばかりを気にする生徒が多いことです。そうした生徒には、面談で今後の学習計画を確認し、次の面談で、計画をやり遂げたプロセスを結果以上に評価してあげることが学年団共通の支援スタンスですと、玉那覇先生が説明してくれました。できたことを具体的に確認し、目の前で褒めて自信をつけてあげる教師の存在は、どの学校の生徒にも必要なことなのだと思います」

互いに高め合う経験が、 生徒の人生の宝になる

1年生の4月から行っている生徒へのアンケート調査は、2年生になった今も継続している。面談を中心とした丁寧なかかわり、さらにはクラスを超えて同じ学年の生徒が交流できるワークショップの開催(写真)などにより、生徒の自己肯定感が高まっていることを、教師たちはアンケート結果から感じ取っている。また、2年次での通熟率が例年より低いことが分かったが、それは学校に対する

* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。



学年団を訪ねて



2学年担任
進路指導部主任
知念真紀子 ちねん・まきこ
教職歴20年。同校に赴任して8年目。
国語科。



2学年担任
比嘉真貴子 ひが・まきこ
教職歴15年。同校に赴任して1年目。
英語科。



2学年担任
小野真太郎 おの・しんたろう
教職歴14年。同校に赴任して4年目。
数学科。



2学年担任
宮城靖 みやぎ・やすし
教職歴24年。同校に赴任して2年目。
数学科。



2学年主任
玉那覇峻 たまなは・しゅん
教職歴13年。同校に赴任して3年目。
国語科。

信頼感の証しだと、学年団は受け止めている。生徒にとって学校が安心・安全な場であるからこそ、学力層別の指導の充実を図ることができると、玉那覇先生は考える。

「医学部医学科志望、GTZ(*2)のSゾーンなど、属性別の集会を開いて生徒間での切磋琢磨を促すことを、この学年団では重視し

ています。2年次の夏季休業前の成績上位者の集会では、『学年全体に対しては、国語・数学・英語の3教科を軸に学習するように発信しているけれど、君たちは理科、地理歴史もバランスよく学んでいくように』などと、高い目標の実現を見据えた声かけを行いました。

一方、比嘉先生は、「先日の学年会議では、成績下降気味の生徒を一層気にかけていこうと、目線合わせをしたばかり」と明かす。

「成績や生活習慣の面で気がかりな生徒のリストがよく共有されるので、目をかけるべき生徒を見逃すことはありません。そのため私も、成績が下降してしまった生徒が後ろ向きな発言をした時に、時機を逃さず『次はどんな計画で挽回しようとしているの?』と、前向きな言葉をかけることができます」

進路指導部主任の知念真紀子先生は、「2学年団は、個々の生徒の状況に加え、学年全体の指導の見通しが共有できている」と話す。

「2学期には、2学年団の発案で、大学入試に再挑戦する既卒生を招いた進路講話を、本校で初めて実施しました。大学入試本番をどんな状態で生徒に迎えてほしいか、そのために、目の前の生徒にはどんな指導が必要かが把握できているからこそ、『この時期に、こんな行事を開催したい』と、進路指導部に具体的な相談ができるのだと思います」

2年次の3学期、そして3年次には、学年としての生徒の一体感をさらに高めたいと、玉那覇先生は展望を語る。

「学校行事ごとに生徒が運営する委員会を発足させ、そこで活躍した生徒を皆でたたえることで、学年としての一体感をさらに高めたいと考えています。難関大学に合格することは素晴らしいことですが、それだけでは人生の宝と言える経験にはなりません。仲間と互いの長所と短所を共有し、高め合う中で、志望を実現してほしいのです。豊かな人間関係を土台に合格を勝ち取る学年を、これからも目指していきたいと思えます」

* 学年団 輝きのポイント *

- * 学年にかかわる教師が総出で面談を重ね、生徒の不安に徹底的に向き合い続けた
- * プロセス評価の重視など、生徒の気質を踏まえた支援のスタンスを定めた

* 2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。